

頸損解体新書 2020 完成報告会

三ツ井 真平

愛媛頸髄損傷者連絡会

2021年10月24日(日)に「頸損解体新書 2020 ～自分らしくあるために～」完成報告会に参加したので報告いたします。

1部では、香川頸髄損傷者連絡会会長、また社会福祉法人ラーフ理事長でもある、頸髄損傷当事者の毛利公一さんによる、「自分らしくあるために一目線が変わると世界が変わる」と題した、オンラインでの基礎講演がありました。

事前の毛利さんの印象は、様々な事業をされ本まで出されていて、ただただ凄い人だと圧倒されるばかりで、ついつい「私とは違う」、「毛利さんだからできるんだ」と考えてしまっていたのですが、講演を聞く中で、毛利さんにも多くの葛藤がありながら現在があることを知り、自分も怖れるばかりでなく、まず挑戦することから始めようと思うことができました。自分自身にとってとても身になる講演となりました。

毛利さんは怪我をする前、早稲田大学で棒高跳びの選手だったそうです。審判になるため、アメリカ留学中、海の事故で頸髄を損傷。医師からは今後自力での呼吸は不可、一生寝たきりを宣告されたみたいですが、決死のリハビリで退院。「絶対また自分の足で歩く」と強い気持ちを持ち現在も毎日のリハビリは欠かさないそうです。

その中でも事業展開には力を入れており、介護など福祉事業にとどまらず、食、美と広く展開しています。そして海外も視野に入れ、成功するための3つのポイントとして、①やるかやらないかの判断の時「やる」を選ぶ、②「●●があればできる」と前向きな発想、③「一人でやらない」仲間を作るこ

とを心掛け実践されています。講演を聞いていた人でエンパワーメントされた方も多かったのではないのでしょうか。

第二部では、テーマ別に ZOOM の機能であるブレイクアウトルームを使い、6つのテーマに別れ、参加者それぞれが興味のある部屋に分かれました。テーマは、①女性視点から見た就労、②一人暮らし、③結婚・婚活・子育て、④高齢介護、⑤交通・まちづくり・バリアフリー、⑥災害と支援機器でした。私は一人暮らしのグループに入りディスカッションを行いましたので、今回はそちらの報告をさせていただきます。

昨今は大人になっても親元から離れず、一人暮らしをしない人が多くなっているようです。そうした中で、今回は「障害者の自立」がテーマとなりますが、世間では健常者の一人暮らしも減少している中で、障害者が可能なのかというところです。世間でイメージとして持たれるのは、「親元で暮らす」、「病院や施設で暮らす」などがあるかと思えます。当事者自身にも、そう思われてあきらめている人も少なからず存在しています。介助者を派遣でき、生活を最低限保証してくれる制度もある現在であっても、やはり情報が広がっていないということ、そうした情報を知っている人や当事者との関わりが少ないということ、参加者の中で共有しました。また、その中でも地域格差があり、都会だと情報、制度があるが、地方だと情報があっても制度が使えないし介助者もいないとの問題点も出てきました。今後はその場で解決できない問題も、SNS を使いながらこの繋がりを継続し、情報共有をしていくことで、知らない人にもできることを広げていこうという、次に繋がるいいディスカッションになりました。

愛媛頸髄損傷者連絡会

他のグループの方も「これを機会に考えることが出来てよかった」、「自分のこととして捉えてなかった」、「同じ悩みや共通する話が当事者同士できてよかった」など活発なディスカッションになったそうです。

今回の報告会では頸髄損傷の方はもちろんのこと、福祉全体にとっても有意義な報告会になったと思います。初めて参加した人の中でも次も参加したいといった声もお聞きしました。

コロナ禍でより社会のオンライン化が進み、こうした報告会も現地に行かず自宅から参加できるよう

になりました。また、コロナ禍が終息したとしても、こうしたオンラインを取り入れた講演などは継続されていくと思います。そうした社会の中で、手軽に繋がることのできる利点を活かして、正しい情報を多くの人に伝えていくための「繋がり」を増やしていかなければならないと改めて考えさせられる報告会でした。

最後になりますが、講和していただいた毛利さん、この完成報告会を開くにあたり準備をしていた関係者の皆さまありがとうございました。